

20160409 東北食農研究会／第9回ミーティング議事録

「アップルファームの挑戦 ～6次産業における障害者の戦力化～」

日 時：2016年4月9日（土）17:30-19:00

場 所：仙台市「エル・ソーラ仙台」研修室

発表者：渡部哲也さん（株式会社アップルファーム代表取締役）

参加者：参加者 15人（発表者除く）

（会社経営者、農家、会社員、大学教授、ライター、公務員、NPO法人理事長、  
行政書士・司法書士など）

目次：

1. なぜ、障害者の戦力化か？
2. 六丁目農園の立上げ
3. 三陸でのカキ養殖と蔵王町での稲作へのチャレンジ
4. 「公」の大切さ
5. 今後の展開

発表：

1. なぜ、障害者の戦力化か？

若林区にあります六丁目農園は、身体障害者、知的障害者、精神障害者、発達障害者の職場になっており、障害者も納税者になっています。障害者の戦力化にクローズアップしています。障害者にスポットライトをあてたいという思いからです。48歳になってやっと世の中のお役に立つようになったと実感しています。

六丁目農園、アタラタなどの店舗経営のほか、福祉飲食コンサルティング（運営ノウハウの提供）も行っており、障害者の戦力化を全国に拡げています。店舗経営はショールーム的な要素もあります。また、近日、障害者の就労支援のための法人も設立する予定です。

私は多賀城市生まれの依存心の強いボンボンでした。広いお屋敷に住んでいました。しかし、高校生3年の時に、父の会社が破産しました。小さい家へ引っ越すことになりました。そこに、毎日のように、借金取りが来ます。そんな中、母は入院してしまいました。一家離散の状況です。それでもなんとか、母のへそくりで高校を卒業することができました。その後、ご商売を始めましたが、「借金」になっていました。オーストラリア食材の輸入を始めました。流通からということです。高田馬場で居酒屋も始めました。流通にいたことから、規格外の野菜、果実は捨てられていることを知っていました。そういった食材を飲食店に卸すこともしていました。また、水産卸業も得意です。そこで、震災後、狐崎にてカキ養殖も始めました。殻付きカキの流通をしています。沿岸部ではカキをむく担い手がなくなっているのが現状です。

二宮尊徳の「たらいの水」のたとえ話が理念になっています。「欲心を起して水を自分の方に引きよせると、向うににげる。人のためにと向うにおしやれば、わが方にかえる」というもの

です。義弟が交通事故に遭い、脳に障害を負いました。その義弟の80歳の父母が介護しています。「自分たちが亡くなった後、この子はどうなる」と心配です。そのような心配しないように障害者にも仕事に就いてもらう。これが私の思いの原点です。手段としては、障害者を納税者にします。目的としては、障害者のやりがいの創造です。現状、障害者は健常者が嫌がる仕事についています。清掃やリサイクル関係です。そうではなく、表舞台に立ってもらいたい、みんなに障害者の仕事を見てもらいたい、そんな仕事をしてもらいたいと思っています。そこで、職人ならばどうかと考えました。職人であれば、コミュニティ能力が無くても、腕があれば食っていけるからです。

現在、障害者手帳を持っているのは約740万人です。人口比率でいえば6%になり、世帯数の1/4にはいることになります。ですので、障害者はマイノリティではありません。六丁目農園の繁盛はそれが背景です。しかし一般的に、福祉事業者のレストランは美味しくないようです。そこで、1ヵ月働いても障害者の給料は1万数千円です。そんな状況をなんとかしたいとまずは始めたのが、たい焼き屋です。そして、六丁目農園へととなります。

## 2. 六丁目農園の立上げ

まずは、障害者の働く環境作りが大切です。組織に人が合わせるが常識となっていますが、アップルファームは人に組織を合わせます。葉で午前中はぼうっとするのならば午後に働きにきてもらいます。また、できるところを伸ばして上げるという長所伸展法を行っています。その上で、補い合います。適材適所に合わせた働く環境を作っています。できないことを宣言できる社会作りのきっかけになればと考えています。私はたくさんの障害者を見てきて、能力の高いところも見付けることができるようになりました。会社を辞めないというのも長所です。一生働くと言ってくれています。

とはいえ、レストランは手段です。目的は働ける能力がある方に職場を提供し、やりがい、いきがいをつくることです。以前は、飲食店100店舗の経営を目指していました。これは、すごいねと言われるためにです。とはいえ、手段を大切にしないと目的を達成できませんし、目的をしっかりと伝えないと、必要とする人材を獲得できません。目的をしっかりと伝えること（そもそもその目的に合わない人は入社しません）が定着率につながっていることを実感しています。

キーワードは再生です。とはいえ、手元資金は50万円しかありませんでした。銀行の信用もありませんでした。でも、やってみました。明確な目標を持つことが大切ということです。そして、それを信じることです。六丁目農園は、居抜き物件、規格外野菜、障害者の戦力化という常識的にはマイナスの要因です。しかし、いまはプラスになっています。1日に150人の来客があります。仙台駅前のホテルメトロポリタンのレストランと同じぐらいです。居抜き物件というのは、もともと道路公団のレストランでした。そのレストランが閉店した後、仙台の飲食店経営者の誰もが手を上げませんでした。なぜなら、産業道路や倉庫があるあたりであり、人も住んでいないからです。看板も出せません。でも、広い場所が必要だったから、ここにしました。現在は、パブリシティに取り上げられるようになっています。

六丁目農園はビュッフェ形式です。この形式であれば接客いりません。また、お料理もお店の都合で出せます。お料理は手作りにこだわっています。しかし、準備段階において非効率であると大反対されました。また、オープン当初、夜の営業もしていましたが、仕込みが夜中の3時までかかってしまいました。3日後、夜の営業を捨て、昼の営業に集中する決断をしました。ぞっとしたものです。アスペルガーの料理長についても反対されました。しかし、続投してもらいました。彼は一度食べた味を忘れない能力を持ち、色彩能力も優れているからです。これらの決断があったから今があります。福祉系出身の社員からは障害者をこきつかっていると怒られたりしたこともありました。しかし、助けてくれたのは障害者たちです。やりがいがあり、好きなことができるからです。給料も1万円から8~9万円に上がりました。そして、お客様が付いてくれたことで、社員も納得してくれました。

今までの社会では、障害者に内職工的なことしかさせてきませんでした。そうではなく付加価値を上げていく必要があります。舞台ファームから、たまねぎの選別をしてもらっています。機械よりも正確です。そして、それを継続して行うことができます。一般社会では働けなくても、一点だけ能力を見付ければずっと続けることができます。

アップルファームの特質は福祉と収益事業の両立です。ボランティアでは長く続きません。障害者に会社をやめられては困ります。この事業は社会的な大義があり、地域に必要とされています。そのために収益を維持することは大事です。現在の社会は厳しくなっています。しかし、社会的な大義は変わりません。むしろアップルファームの事業を社会が求めてきています。追い風を感じています。お客様に対して商品とサービスに妥協せず、社会的に福祉に甘えないことです。そして、障害者が働くことで必要とされている実感を得ています。WIN-WIN-WINの関係を構築することが必要です。ゼロサムではありません。東日本大震災以降、日本人はこれらのことに気付き始めたのではないかと感じています。ゼロサムの行き過ぎからの揺り戻しでしょう。

誰かの役に立っていること、必要とされていることが大切です。これが幸せにつながります。東日本大震災の被災者だけでなく、障害者もまた同様です。言い換えると、マズローの言うところの、所属欲求、承認欲求の手助けをしてあげるということです。

### 3. 三陸でのカキ養殖と蔵王町での稲作へのチャレンジ

東北は地方1次産業が担ってきた地域です。東日本大震災の直後、お金があっても物を買えない状況になりました。物を持っている人間は強いということです。食材がなければ、飲食店は単なる箱です。強い危機感を持ちました。そこで、カキの養殖と稲作を始めることにしました。日本の農産物は安全といっても、農薬含有量は多過ぎます。また、東日本大震災以前も、三陸地方の養殖業については担い手の問題がありました。しかし、漁協を頼りとするだけで変えようとしていませんでした。東日本大震災により卸先が無くなりました。養殖業の方々は、土木業に転職するかとお話されていました。そうではありません。素晴らしいカキを養殖できるのです。そこで、その方々を、銀行や東京に連れて行きました。お客様からの直接のクレ

ームへの対応も憶えていただきました。だましまし行いました。そのうちに、喜びの声も聴くようになりました。六次産業化はお客様の生の声が届くことでもあります。また、お客様も生産者となつがることで食育にもなります。さらに、後継者の確保にもつながっています。我慢強く、事細かくお伝えする必要があります。これは私が障害者に育ててもらったところです。

稲作については、「奇跡のリンゴ」の木村秋則さんとの出会いが大きいです。農家の収入は減少しています。その農業を障害者が行うのではさらに収入が低くなってしまいます。では、どうするかを考えました。その答えが、お米です。ストックができるからです。とはいえ、生産は難しいかもと考えました。木村さんに相談すると「出来るよ」とお答えをいただきました。しかし、六丁目農園周辺では難しかったです。そこで、蔵王町にて行うこととしました。当初は耕作放棄地でも貸してくれない状況でした。商社のカメイからのご紹介にて農地を借りることができ、農業委員会も認めてくれました。ただし、新参者なので周囲からガンガン言われました。町役場前の農地なので、みんな見えています。去年は自然農法のササニシキに挑戦します。慣行農法の稲とは色が違いますし、根も太さが違います。厳しいことを言っていた方から「良い米だね」と言葉をいただきました。涙が出ました。自然農法は生産のプロセスが違いますが、良いお米が採れました。バカだなんだ言われましたが、やり切りました。

#### 4. 「公」の大切さ

私憤と公憤とがあります。破産した父上のリベンジをしてやろうが私憤であれば、耕作放棄地が増えて担い手が少なくなっていてなんかあったらどうするというのが公憤です。怒りを私から公へ転換していきました。企業理念がしっかりしていないと、共鳴する人が集まりません。そもそも、合わない人は来なくなります。また、企業理念に合う人のほうが教育しやすいのです。

CSR（企業の社会的責任）からCSV（共通価値の創造）へ舵を切るべきです。CSRは仕事で何をしても良いけど、寄付をしましょうというものです。CSRは障害者という社会課題そのものをビジネスにしようというものです。企業が公器となるということです。企業のあり方が変わってきています。公益資本主義と言っても良いでしょう。お金を否定はできませんが、「公」が大切なのです。たとえば、渋沢栄一の「論語と算盤」、二宮尊徳の「たらいの水」、ヤマト運輸の「ヤマト財団」などが触れたり、実行してきています。現在、「JKめし」と六丁目農園のお米とでコラボをしています。10代、20代の女性が支持しており、お米を食べてもらおうにつながっています。大義を持っていますと、周りからお声かけしていただけます。おかげさまで、営業していなくても、いろいろな方が集まってきています。

#### 5. 今後の展開

蔵王町での事業は地域との連携をしています。地域の方が主役になるように仕掛けています。過疎化しているところでも、大繁盛している旅館、レストランはあります。これは企画次第ということです。みんなが来なくなる仕組みが大切です。これを農業でどう巻き込んでいくかを考えています。

以上